opusdei.org

家庭は成長の場(1)

ひとりとして偶然に生まれてくる人はいない。一人ないとしてはない。一人ないといる人はない。一人なの時間を持つ存在だ。 人格の調和のある成長のために、子供が最初の瞬間から家族の中で愛されていると自まることは決定的である。

2016/05/10

あの子はお母さんそっくりだ。笑い方や話すときの手の動かし方、そして歩き方なども…。このようなコメントはよく耳にする。それというのも、実際私たちはほとんど気づかな

いままに、両親や兄弟の人となりから多くのことを真似ているからだ。 その中には目の色とか気質とか体つ きのように遺伝的な面もあるだろ う。他方、日々の人との付き合いや 教育を通して、身につけたものもあ る。

このシリーズで見てきた成熟した人の資質は、家族の中で生まれ育つ。それを考えると、家族の役割がいる。家族は、で重要かがわかる。育ち、死んは、でではない場である。「わたちである。だんな状態に置かることがある。だんな対に置かることがいきに認識するのであり続けるのうちに認識するのうちに認識するのでありに認識するのであり、2015年3月18日の一般謁見)。

神が望まれた家族という制度には、 父であろうが兄弟であろうが、また 子供であろうがみんなが責任を分担 する。

家庭とはみなで支えるもの

私たちは自分の家族を選んだのでは ない。神がそれを選ばれた。神は、 私たちをキリスト者にするため、両 親や兄弟の徳だけでなく、欠点も考 慮に入れておられた。「このことに ついては誰もが経験したことです が、家族の中では、今の私たちが、 手にしているもので、奇跡が起こり ます。・・多くの場合、それは理想 的なものでもなく、こうあって欲し いというものでも、こうあるべきだ というものでもありませんがし(フ ランシスコ、2015年7月6日の説 教)。

家族の全員、すなわち祖父母、両親、子供たち、孫たちは、家族にキリスト教的な雰囲気を醸し出すために、各瞬間に自分自身の最もよいものを与えるよう呼ばれている。家族

というものはみんなで支え合うもの だ。両親も子供とともに成長し、年 が経つにつれて、家族内での役割は 変化していくこともある。みんなを 支えていた人が、支えてもらう側に なったり、先頭に立っていた人が最 後になったりする。家族は衣食住な どの基本的必要性を満たす場よりも ずっと重要なもので、そういうこと の他に、本当の人間的な価値の美し さを見つける場である。克己の精神 や隣人への敬意といった健全な人間 関係を保つために必要な価値を見つ ける場である(聖ヨハネ・パウロ2 世『家庭』66参照)。あるいは、責 任感や忠実さや奉仕の精神を身につ ける場とも言える。これらの価値 は、ゆっくりと陶冶されていくもの だが、あるグループに属していると いう単純だが堅固な感覚を必要とす る。それは単に世界に投げ出されて いるのではなく、最初から愛情に よってできた世界の一部、すなわち

家庭の中で受け入れられていると感 じることである。

愛されていることを知ること

見)。

この地上では、今日も大勢の人が生 まれている。しかしながら、各人は

が必要だったのです。イエスの道は その家庭の中にありました」(フラ ンシスコ、2014年12月17日の一般謁 唯一無二の存在で、永遠から望まれて生まれてきた存在だ。「私たちー人ひとりは、神の計らいに基づいて生まれたのです。私たち一人ひとりは、神から望まれ、愛され、必要とされています」(ベネディクト16世、2005年4月24日の説教)。

子供が生まれてまだ間もないのに、 母親はもうあかちゃんが泣くとき何

を求めているのか、眠たいのかお腹 か減っているのかを見分ける。次に あかちゃんが微笑み始める。それは 個性の芽生えで、同時に子供らしい 特徴である人まねの最初の現れであ る。幼児は見る物を何でも自分のも のにしてしまう。両親は子供にとっ て安心が生まれるところである。幼 児が知らない人が近づくと、父親や 母親の足にしがみつくというよく見 られる光景は、それを明快に示す。 この守られているという安心感か ら、子供は自由に動き自己を出て世 界を探求し、隣人に心を開くことを 学んでいく。

生まれつきの性質と教育だけによって人の人格が全面的に決定されるというわけではないが、人格の調和のある成長のために、子供が最初の瞬間から家族の中で愛されているとと覚することは決定的である。まず愛を受けて初めて、後で隣人を愛することができるようになるのである。

愛情と世話――誰もが持っている自己中心の傾きを直していくための要求と剛毅も含まれるが――を受けることによって、子供は自分と隣人が価値あるものであることを知るは、今であることを知るとでである。両親の優しく評価し、それゆるとで自分を正しく評価し、それゆえに隣人を愛し、利己主義を捨てることを可能にする。

キリスト信者の家庭で生まれる愛の 絆は、死によってさえ消滅しない。 もしまだ小さいときに親を失うこと があっても、その場合信仰によっ て、すでにこの世でイエス、マリ ア、ヨセフが、多くの場合寛大な他 の人たちを通して、親代わりになっ てくれることを知る。聖家族にな らって、非常に人間的に、同時に非 常に超自然的になるように努めよ う。そして、アビラの聖テレジアが 書いたことが実現する日が来ること を期待しよう。「私は自分が天国に いるように思えました。そしてそこ

で最初に目にしたのは父と母でした」(『神の憐れみの人生』38章)。

真の自己実現

「おかあさんは食事を作ることが好 きだったの。洗濯は。お掃除は。私 たちを学校に連れて行くことはしな どと娘から尋ねられ、もう年老いた 母親の脳裏に昔の思い出がよみが えってきた。家族の問題に悩んだ 日々、家事に疲れてぐったりした 日々、家計が火の車で家計簿とにら めっこしたこと、小さな子供たちが 高熱を出した冬の日々などなど。時 にはいらいらが募って皿を何枚か壁 にぶつけたこともあった。そのよう な思い出にふけって、こう簡単に答 えた。「好きだったかと言えば、そ うね、それほど好きではなかった わ。でも確かなことはあんたたちを 愛していたということかな。あんた たちが大きくなるのを見ると嬉し

かったわしと。世の中のどれほど多 くの母親や父親が同じことを言うだ ろうか。教皇は、これらの親は立派 な賞を受けるに値すると言われる。 なぜなら、彼らは「偉大な数学者で さえ解けないような難解な問題を解 く方法を知っています。彼らは24時 間でその2倍分の什事をこなしま す。それはノーベル賞に値するくら いです。24時間で48時間分の仕事を するのです。私は一体どうやってそ れをするのかわかりませんが、とも かくやっているのです。家庭にはそ れほど多くの仕事があるのです」と (2015年8月26日の一般謁見)。

家族は完全ではないが、調和を保 ち、家族の一人ひとりの個性をよく 見極める。両親は権威を持つが、そ れを子供に押しつけようとはしな い。子供を自分たちの望み通りの人 間にしようとするのではなく、親の 指導と愛情の下に彼らの可能性を伸 ばすように導く。家族のよい雰囲気 を作る責任は父親にも母親にもある。それぞれが互いに譲り合い、また自分を子供に与えることによって、家庭は人間的な成長の場となる。

また、家族の共同生活は個人の才能 を見つけることを助けてくれる。そ れは、本人はなかなか気づかない が、周囲の人は容易に発見する、優 しさ、元気のよさ、ユーモアなどで ある。家族を愛することによって、 困難の最中でも、各人は自分の性格 の最もよいもの、肯定的な面を引き 出しことができるようになる。疲れ や緊張のために、悪い面が現れたな ら、赦しを願って再びやり直す時が きたのだ。「自らの過ちを認めるこ とによって、また失われたもの―― 敬意、誠意、愛――を取り戻したい と願うことによって、人は赦される に値する者となります。このように して、病が癒やされます。謝ること ができなければ、赦すこともできま

せん。謝ることができない家庭は、 息苦しく、よどんだ雰囲気になって しまいます。『ごめんなさい』とい うこの大切なことばが失われると、 家庭内に多くの苦しみや傷が生じ、 涙が流れます」(フランシスコ、 2015年5月13日の一般謁見)。

女性は母親としての自分のもつ資質

が代替不可能なものであることを発 見するだろう。この母親の役割を果 たすことで神に忠実になろうと努め るなら、家庭が居心地のよい場とな り、家族皆が愛情や他者への敬意 や、犠牲と自己放棄の精神を身につ け、個人的に成長することに貢献す るだろう。「女性に託されている使 命とは、家庭や社会や教会に、女性 だけが持ち、提供することのできる 何か女性に独特の貢献をすることで す。細やかな優しさ、疲れを知らぬ 親切、具体的なものへの愛、素早い 機知と直感、謙遜で篤い信仰心、粘 り強さなどは、女性のもつ貴重な特 質です」(聖ホセマリア『会見集』 87)。

父親も自分が子供たちの導き手であ ることを発見するだろう。父親は子 供が成長するのを手助けし、彼らと 遊び、一人ひとりが個性を伸ばせる ように見守る。キリスト教徒の父親 は家族が自分の第一の事業であるこ と、その中であらゆる次元において 自分を成長させるビジネスであるこ とを知っている。そのため、あまり にも心身共に消耗させる生活リズム には注意しなければならない。それ によって、最も価値のある目標を見 失い、精神的に崩れ、家族の関係を 破壊する可能性があるからだ。

それゆえ、両親が子供のそばにいること、子供たちに心の智恵を伝えることの誇りをたえず培うことは、非常に大切である(フランシスコ、2015年1月28日と2月4日の一般謁見参照)。両親が子供のそばにいない

ことは多くの問題を引き起こす。

「明るく楽しい」家庭において、父親と母親はそれぞれ自分の役割を果たす。この父と母の役割は、誰かられたかできず、でもらうことができず、のことができば、中が何人のよる。このことは、神が何人ない。とは関係ない。とは関係ない場合、家族の他なその人たちや友人たちに対して霊的なり、 親や母親の役割を果たすことができる。

待つことと約束すること

「私たちは普段はあまり意識していないかもしれませんが、この世界に兄弟愛を伝えるのは何あろう家族なのです」(フランシスコ、2015年2月18日の一般謁見)。民族の基本的な構造や国々の平和などは、一生の間忠実を保ち男女が互いに自己を捧げ合う家庭の上に築かれる。

今日では、多くの人が冒険を夢見て いる。その望みに応じようとする企 画は無数にある。これ以上ないほど の種類の、刺激的で、瞬間的、感動 的なもの、例えば深海への潜水、大 空の飛翔、高いところからの飛び込 みなどが人々を魅了する。結婚して 家庭を持つという約束は、それらと 比べてずっと目立たないが、いつも 驚嘆を引き起こす。なぜなら、私た ちは永遠に愛するために作られてお り、とどのつまりそれ以外のものは 苦い味しか残さないからだ。永遠に 続かない愛は、小文字の愛、つまり 本当の愛ではない。

家族生活では様々な逆境や危機に直面するが、家庭を作る約束への忠実はいつもいかなる逆境や危機よりも強い。「愛は死と同じく強い」(雅歌8・6)。大きな困難があっても、しっかりした動機があれば、それをたえることができる。しっかした動機とは、単なる思想や制度ではな

い。それは何よりも人である。愛に 応えることは各人の心の最も深いと ころに及ぶので、それを拒否すると き、私たち自身が傷を負う。

言うまでもないことだが、偉大な計 画はつねに大きな危険を伴う。今日 では多くの若者が、間違うことを恐 れて、いつまでも続く約束をするこ とに二の足を踏む。しかし実際、心 に呼びかけを感じながら愛の扉の前 で留まることはより大きな誤りであ る。それゆえに、心を固めること、 心を成熟させることが必要である。 これが婚約期のキリスト教的な意味 である。「婚約期は、果実のように 熟する人生の一時期です。それは、 結婚する時まで、愛のうちに成熟す る道なのです」(フランシスコ、 2015年5月27日の一般謁見)。結婚 に対して「はい」と言えるための最 もよい訓練、またその堅固さを得る ための最もよい試験は、教会が婚約 期にある二人に疲れることなく求め

 る子供は、忠実な母親、忠実な父親 になり、あるいは、共通の家族であ る人類に奉仕するために自己のすべ てを神に捧げる。この独身の召し出 しを受ける者たちも、別の仕方でよ き母、よき父の役割を立派に果た す。

この冒険は時間が過ぎても継続する。家は狭くなり、新しい愛と家庭が生まれる。活気が、生きる喜びが再び生まれる。「人々の希望と世代間の調和は強く結びついています。子供が喜ぶことにより、両親の心は躍り、未来が再び開けます」(フランシスコ、2015年2月11日の一般謁見)。

ウェンセスラオ・ビアル

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/kazokuwa-seicho-1/(2025/11/20)